平成 27 年度
グローバルステージ in BOLIVIA・in SEATTLE 報告書

海外県人会人材育成・活用推進事業実行委員会

目次

01 **楽野　なぎさ**
福岡女学院大学国際キャリア学部１年

03 **山縣　芙美**
九州大学工学部３年

06 **合田　顕子**
ヒューマンアカデミー専門学校日本語教師養成講座

09 **楢原　直人**
西南学院大学法学部４年

13 **立石　ミュウ　華子**
立石ガクブチ店

17 **田崎　里奈**
福岡教育大学教育学部２年

20 **津野　愛美**
九州大学農学部２年

23 **山本　悠人**
九州工業大学情報工学部２年

26 **久保田　琴乃**
西南学院大学人間科学部３年

29 **今村　友梨香**
杉村包装資材株式会社

Global Stage in Bolivia 報告書

福岡女学院大学国際キャリア学部１年
桒野　なぎさ

まず、この研修に参加し、自分のなかで少しの成長を感じられたことについて報告します。今年の３月まで私はいわゆる進学校の高校で、受験生として奮闘していました。しかし、全くといっていい程勉強をせず、母と毎日のように喧嘩し、学校も休みがちでした。自分の感情がコントロールできず、人と話すと泣いて、有名大学に行くということや、誰かと競争することが嫌で嫌でたまらず、自分が何をしているのかわからなくなっていました。受験期に入るまではやりたいことがたくさんあり、ノートにそれを記し未来計画をたてていましたが、そのノートを見ることも嫌いになっていました。大学に入学してからは、二度と同じ精神状態にはなりたくないと思い、様々なことに取り組むように努め、封印していた未来計画ノートを引っ張りだして、自らを奮起させました。不器用で鈍臭い私は、やりたいことを上手にこなせてはいませんでしたが、自分なりに挑戦することの素晴らしさを感じていました。この研修に応募し、初めての面接を経験し、つたないながらも自分の言葉で思いを伝えました。これも私にとっては大きな成長だと思っていました。

今回の研修で、苦しんでいた受験期と比べて自分が成長したな、と感じることができたのは、ボリビアから帰国し、日常に戻った今です。それは感謝を覚えたということです。現地でも口ではたくさん感謝を伝えてきましたが、今、心の底から感謝で溢れています。大きく成長できたのは、何も、自分だけが頑張ったからではないと気づいたのです。また、喧嘩は相変わらず絶えませんが、今まで家族が私を支えてくれていたことを、とても強く感じました。この研修で出会った人や、サンファンの方々、ありとあらゆる人にありがとうと言いたいです。受験期の苦しみにさえも感謝しています。今私が様々なことに挑戦できているのは、私自身の行動力がすごいのではなく、私と関わってくれた全ての人のおかげだという、一番大事で一番忘れてはいけないことに気づけました。それが今回の私の成長です。

続いて、サンファンの福岡県人会や、ラパスを訪れて感じたことを報告します。サンファンでは JICA 主催のセッションで青年部の方々とサンファン市について考え、ラパスでは JICA ボリビア事務所を訪問し、ボリビアについて考えました。少ない時間でしたが日本のことすら特にあまり考えてこなかった私が、いつ

の間にか真剣にボリビアやサンファンの暮らしを豊かにすることを考えていました。ボリビアはとても素晴らしいところでした。文化や環境において戸惑ったり、正直きついと思ったりもしましたが先入観を捨て、今見えているものを素直に受け止めるということを学びました。日本にいると、南米や東南アジア、中東、アフリカなどはどうしても「貧しい国」というレッテルを貼ってしまいます。そして「貧しい＝不幸」というイメージができてしまっています。そんな国にはボランティアが必要だ、と勝手に思ってしまっています。確かにお金のある国はある程度の余裕もあるし、様々な制度も作れます。ただ、一方的で偽善的なボランティアは何の意味もないものだと感じました。その国や地域が何を必要としていてどんな文化背景があるのか、その国や地域の良さを引き出し、欠点を改善するためにはどうしたらいいのか、共に考えることがとても大切だと思いました。ボリビアでは、文化背景を学び現地の人とふれあい、良いところも悪いところも見ました。そうしたことで、知らないうちに日本のことを考えるよりも、彼らのことを考えることに真剣に、情熱的になっていたのだと自己分析しています。

今私は、様々な状況とよいタイミングに恵まれたおかげで、今回の研修で訪問したサンファン学園に、日本語の教科書を送る計画を進めています。やはりこの計画も、その土地を訪れて必要だと理解したから思いたちました。きっと、何も知らないと、日本語の教科書を送るよりもお金を送ってあげたほうが役に立つだろうと考える人もいるだろうと思います。そのほうが効率的ですが、ボランティアは心が伴ったものだと私は思います。心を伝えることで与える方も受け取る方も心が豊かになり、互いに感謝し、今後に繋げたいと思えるのだと思います。

結局、私が見たボリビアの人々はとても幸せそうに見えました。本当にとても幸せそうでした。

この研修では、たくさん愛のあるおもてなしを受けて、幸せをたくさん分けてもらいました。学べたのは、感謝することと知ること、この二つがとてつもなく重要で、また、実はそんな重要なことを普段忘れてしまっていたということです。そして、分けてもらった幸せを自分のできることで返すということが、本当に心のあるボランティアなのだろうということです。

JICA のような大きな規模での素晴らしくて心のあるボランティアは、色々な決断や責任が伴うため、簡単にはできません。繰り返しにはなりますが、自分のできることでボリビア・サンファンと繋がっていけたらいいなと思っています。短い期間でしたが、とても気持ちが豊かになりました。今後もこの気持ちを忘れないように励んでいきます。

グローバルステージ in ボリビア　報告書

九州大学工学部３年
山縣　芙美

（１）県人会との交流について

県人会の方々は、初めて会った見知らぬ私たちに、たくさんのおもてなしをしていただき、まるで親戚の家に遊びに行ったような感じでした。訪問者を盛大にもてなすというのは日本文化ともいえると思います。また県人会のつながりは日本で問題となっているような近所付き合いの希薄化を感じさせず、集まりがあると婦人会の方がごちそうを持ち寄り、青年部は定期的に集まって活動するといった強いつながりを感じました。

（２）移住の歴史理解について

事前学習で移住した方々がどのような苦労をされたかということを知っているつもりでしたが、実際に行ってみて原生林を切り拓き農業をできるまでにしたことへの凄さを実感しました。移住についてたくさんお話を聞く機会があったけれど、一番心に残っていることは、日本人だから原生林開拓をして成功することができたとボリビアの大統領がスピーチしたということです。また、サンファンの農作物がボリビア国内で質が良いと評判で、売れているといったお話を聞き、海外で日本人の勤勉さや丁寧さなどが評価されているのだなと感じました。

（３）自分のテーマについて

①日系人の食生活･食文化

サンファンの方が主食としているものがはっきりとわからず、期間中はパンと白米の両方を食べました。ホームステイ先の方に聞いてもはっきりとはしていないようでした。日本人が主食とするもちもちとしたジャポニカ米を自給して食べているのかと想像していましたが、インディカ米を品種改良してジャポニカ米に似たもちもちとしたインディカ米を栽培し食べていました。移住地の方々のほとんどが、農業をされているので自分の畑で育てた米や卵、お肉を食べているようです。サンファン移住地にはスーパーやコンビニはなく、日用品が何でもそろう商店があります。ボリビアと日本の食文化を融合させて形成していったというより、気候環境に左右され、そこで出来る農作物を育てて食べている

うちに、今のような食文化ができていったように感じました。カトラリーとしては箸も使えるがフォーク･ナイフのほうが使い慣れているようでした。これは食事のメインであった肉類が日本の様に薄切りで脂がのっているのではなく、分厚くて歯ごたえのある赤身肉であることに関係していると思います。

②高山を活かしたインフラ設備

ラパスは想像以上に傾斜のある街で土地利用の難しさが見てとれて、補強工事が行われていない崖の上に家が建てられており、崖のすぐ下にも建物があり、地震がない国とはいえ、危険と隣り合わせにあると感じました。

交通インフラについて、ロープウェイが市民の足として使われていることは高山都市の特徴だと考えます。しかし、一本しかないうえ、停留所が少ないため市民の移動手段としてはまだ物足りないものだと思います。

道路の整備は決して良いとは言えず、スムーズに走ることが出来る道が少なく、アスファルトではなく、レンガ張りの道が多くて舗装が行き届いていませんでした。また、信号や交通表記といった交通ルールに関しての整備もほとんど機能しておらず、何度かひやっとする場面もありました。

下水設備は、下水処理設備が整っているわけではなく垂れ流しをしており、川の水は濁っていてゴミが浮いている状態でした。ゴミ処理についても埋め立て処理をしており、リサイクル制度はないそうです。こうした処理方法をとっていても市民に健康被害などが顕著に出ていないといったことから、インフラ整備がされていないそうです。ゴミ処理場の整備やリサイクルは、どの国も行っているもの思っていたが、ボリビアはゴミを埋め立てるのに十分な土地があるためそういったことに目が向けられないということでした。

（4）研修全体について

グローバルステージ in BOLIVIA では貴重な体験ができ、志望理由書に書いた３つの目的をしっかり達成することができて、参加して本当に良かったと思います。今回の研修で考えたことは、おもてなしや規律･時間を守ること、勤勉さなど、今まで当たり前だと思っていたことは、日本人の強みとして世界に通用するということです。日本人のこういった強みがあってからこそ移住して成功することができたという話を聞いたり、実際に広大な畑や養鶏場を見たりして強く感じました。これは目的の１つにあげていた進路選択に大きな影響を与えるものとなった。以前から海外で働きたいという気持ちはありましたが、日本人としての強みを何らかの形で活かしていきたいと思うようになりました。また海外のインフラを見たことにより新たな気づきがあり、今後の学習に対して意欲が増してきました。

研修の目的であった県人会の方との交流は、とても充実しており、皆さんに出

会えたことに感謝の気持ちで一杯です。盆踊りや県人会の集まりのようなことを今まで体験したことがなかったので、とても新鮮で人とのつながりの大切さを感じました。

　そして、たくさんのおもてなしをしていただいたので、お返しがしたいと強く思っています。これから在ボリビア福岡県人会とのつながりも大切にしていきたいし、他の国の県人会とのつながりをもち、おもてなしをしていきたいと思います。

グローバルステージ in Bolivia　報告書

ヒューマンアカデミー専門学校
合田　顕子

私は今回、グローバルステージ in Bolivia に参加し、ボリビアの日系人移住地であるサンファンと首都ラパスを訪問しました。サンファンでは、移住当初から現在に至るまでのお話を伺ったり、農場や養鶏場を見学したりして、移住地の歴史や、現在どのように農業が営まれているかを学びました。また、福岡県人会の方々のお宅にホームステイさせていただき、日系人の方がどのように生活されているのかを肌で感じることができました。ほかにも、サンファン学園という日系人子弟が通う小中学校で、日本語の授業を見学したり、移住地６０周年の記念式典に参加させて頂いたりと、普段できない経験をたくさんさせてもらいました。また、首都ラパスでは、JICA ボリビア事務所・在ボリビア日本国大使館を訪問し、国際協力活動や現地の治安・経済などについてお話を伺いました。

サンファン移住地では、日本では食べたことがないものを食べたり、日本では考えられないほど広い土地で農業が行われていたりと驚くことばかりでしたが、一番衝撃的だったのは、福岡県人会の方々が「日本というルーツを大切にしている姿」が生活の所々に垣間見えたことです。日々の生活の中で、ご飯と味噌汁・卵焼きといった日本食を食べたり、毎年浴衣を着て盆踊りに参加したり、ホームステイ先に子どもたちの書道の作品が飾ってあったり、昨今の日本では薄れつつある日本文化が根強く残っていました。また、スペイン語・日本語のどちらかではなく、両方を使って会話をしていたり、６０周年記念式典では日本舞踏とボリビアの民族舞踏が披露されたりと、ボリビアの言語や文化を受け入れながらも日本語や日本文化がきちんと継承されていると感じました。さらに、福岡の方言を話していたり、博多名物のラーメンや銘菓の“博多通りもん”がよく知られていたり、福岡という共通のルーツを持っていることを感じる場面も多くありました。

一方、県人会の方の中には、時代と共に日本語や日本文化の継承が難しくなっていることに問題意識を持っている方もいて、文化伝承に対する思いの強さを感じました。私は、現在日本語教育を勉強しており、来年から日本国外の教育機関で日本語教師として働きたいと考えていることから、かねてから「日系社会ではどのように日本語が使われていて、子どもたちは家庭や学校でどのように日本語を学んでいるのか」ということに関心がありました。サンファン学園の日本

語の授業見学や県人会の方々との交流を通じて、日系人の子どもたちが日本の小中学校で使われている国語の教科書で読み書きを勉強していることや、ボリビア人児童も日本語を勉強していることがわかり、日系社会での日本語教育への関心がさらに強くなりました。また、県人会の子どもたちと遊んでいた際、日本の上野動物園に戦時中に死んだ動物たちのお墓があるという話を日本語の授業で先生から聞いた、と教えてくれたことが、とても印象に残っています。このプログラム中、「サンファンではどのような日本語教育が行われ、求められているのか」をずっと考えていたのですが、この出来事はその答えのヒントになったように思います。日本語教育とは、ただ日本語を身につける場ではなく、日本の歴史や文化を伝えていく場なのだと気づかされ、教育の与える影響力を実感しました。

JICA の方々、青年会のメンバーと私たちでサンファンの問題を話し合い、解決策を考えるワークショップをした際には、青年会のメンバーの地域課題への問題意識の強さが刺激的でした。自分自身、住んでいる地域の課題について深く考えたり、同年代の人達と活発に議論したりしたことはなかったので、サンファンの青年たちの地域に対する愛着の強さを新鮮に感じました。

ラパスでは、JICA ボリビア事務所を訪問し、青年海外協力隊の活動について詳しく話を伺いました。サンファンで行ったワークショップの際に、青年海外協力隊としてボリビアに派遣されている方々とお話をする機会があったのに加え、事務所を訪問して詳しく説明をしていただいたため、協力隊に対する関心がさらに強くなりました。また、ラパスという都市についてですが、街並みや地形が日本にはないもので、見るもの全てが印象的でした。標高４，０００m近くに位置する都市ということで、移動中は少し空気が薄く感じましたが、高山病予防の薬を飲んでいたので何事もなく無事に過ごせました。３日間という短期滞在でしたが、実際に過ごしてみて、あのような高地で人々が普通に生活していることを不思議に思いました。

最後に、私は今回のプログラム全体を通して、自分のルーツに誇りを持つことの大切さを強く感じました。日本から遠く離れた国で、自分たちのコミュニティを築きながら困難を乗り越えてこられた１世の方々、その思いを引き継いでいる２、３世の方々と交流する中で、自分が日本人であること、中でも福岡県民であることを再認識したからです。また、ラパスでの観光中や日本とボリビア間の移動中には、日本語で挨拶してもらえたり、日本のアニメが好きだと言ってもらえたりと、日本に対して良いイメージを持っている人々に出会いました。今後、自分の故郷である福岡県以外の地域で働く機会が多いと思いますが、日本や世界のどこに行っても、自分が日本人であり、福岡県民であることの誇りを心に留めて働きたいと思います。

また、今まで海外の教育機関で日本語教師として働くという目標を持って勉強をしてきましたが、日本文化の継承を目的とした日本語教育にもいつか携わりたいという思いが強くなりました。今までは、日本語の先生は日本語を教えるという認識が強かったのですが、今回のプログラムを通して、書道や剣道などの伝統的な文化、日本食などの身近なものを伝えることも日本語教育につなげられるという発見があったので、今後は現在の学校での勉強に加えて、海外に住む人達に日本語・日本文化をどのように伝えていくかを日々の生活の中で考えていきたいと思います。

平成 27 年度グローバルステージ in BOLIVIA 報告書

西南学院大学法学部４年
楢原　直人

以下のとおり研修の報告を致します。

１．研修内容
①サンファン日ボ協会訪問
②サンファン農協訪問
③農協施設・農地・鶏舎等視察
④サンファン学園訪問
⑤サンファン日本人移住６０周年式典参加
⑥JICA 国際協力理解ワークショップ参加
⑦農産物品評会視察
⑧盆踊り参加
⑨ラパス市内視察
⑩在ボリビア日本国大使館訪問
⑪JICA ボリビア事務所訪問　　等

２．研修内容の概要と感想
①澤元会長に応対していただきました。日ボ協会は、サンファン移住地内の日系人を対象とした行政事務を取り扱っているそうです。

②日本の農協と同じく、組合員の営農活動の指導及び、農作物の共同販売、また共済事業も行っています。組合員数は百名。農協建物内で、日比野ボリビア日系協会連合会会長のサンファン移住地の歴史についての講話を聞く。農業が基幹産業であるサンファンに於いて、農協の期待される役割は大きく、また農業の歴史が移住地そのものの歴史になっていると感じました。

③鶏用の飼料製造施設、また、鶏卵用紙パック製造のための古紙再生施設を見学しました。環境意識の高まり（あるいはコストカット意識の）を感じました。
　農地は広大で、営農はかなり機械化されているようでしたが、日本の農機具はボリビア国内に代理店がない（これによりメーカー保証もない）ため、個人輸入

に頼らざるを得ない状況だそうです。サンファンに限らず、南米地域の農業の機械化、合理化は求められる課題であり、日本メーカーの進出は、需要の面からも検討できるのではないでしょうか。

養鶏場に入る際は、私たちが乗る車は消毒するものの、乗車する各々は消毒等の措置が取られませんでした。農協によると、鶏卵の生産農家数は６７戸で、平均で１戸あたり約２万羽の鶏を飼育しており、サンファンにおける大きな産業の一つになっているそうです。

④サンファン学園は、小学校から中学２年までの一貫教育を行う、日ボ協会が運営する学校で、幼稚園も付設している。小学校は１８５名、中学校には５４名が学び、また幼稚園は７０名が通っていて、教職員は２３名だそうです。日系人だけではなく、日系ボリビア人、更にはボリビア人も一緒に勉強していました。日本語を母語として教育してきたサンファン学園でしたが、近年入学を希望するボリビア人が増えており、また各家庭、移住地内の使用言語の変遷から、現在は日本語を外国語として位置づけて、様々な方法を試行錯誤しながら新しい時代に、学園にふさわしい日本語教育のあり方を模索しているところだそうです。次世代を担う子どもたちを教育することは、その共同体の未来を形づくることに繋がると思います。今後は日系人・ボリビア人が共存共栄できるサンファンをつくるためにも、サンファン学園の新しい教育には市民の多大な期待がかかっていると思います。

⑤サンファン日本人移住地は今年で入植６０周年を迎えたそうです。８月２０日には、慰霊祭と記念式典が行われ、慰霊碑にはこれまでにお亡くなりになった方々の名前が彫られていました。原生林を開拓し、医療インフラも満足に整っていなかった当時、志半ばで亡くなった方々のことを思うと、只ただ安らかな眠りをお祈りするばかりです。記念式典では、祝辞を大統領府大臣や日本国大使、市長、更には福岡県をはじめとする関係自治体、その他様々な団体の代表が読み上げ、このセレモニーは終始和やかに、大々的に執り行われました。来賓のそうそうたる顔ぶれに、サンファン自治体はすでに日系人のみが関わるものではなく、ボリビア国内において大きな存在感を放っていることを実感させられました。

⑥サンファン青年会とともに、JICA の国際協力活動についての理解を深めました。サンファンが抱える問題をピックアップし、それに対する解決策を考え、JICA のボランティア職種分類表から必要なボランティアを探すというものでした。現地で生活する青年から、現地が抱える問題を聞くことで、外部から来た私たちだけでは気づくことのできない議論ができたと思います。日本にある構

成員の高年齢化が進む自治会を見慣れた私たちにとっては、サンファンは若者が地域の行事にしっかりと参加しているかに見えましたが、青年会などの自治会は参加者の減少、消極的態度に頭を抱えているそうです。

⑦農業はサンファンの基幹産業です。今回参加した農産物品評会では、多くの種類の農産物が出品され、各農家がそれぞれの農産物でその優秀さにおいてしのぎを削っていました。品評会場に足を運ぶ人の数も多く、その盛況ぶりから、農業、農産物に対するサンファンの人々の関心の高さが伺えました。

⑧盆踊りでは、炭坑節など馴染みのある曲や、サンファン小唄というオリジナルソングが流れる中、太鼓があるやぐらの周りでぐるりと盆踊りが行われました。夜には提灯の明かりも映え、そのうち櫓の周りに幾重もの輪が出来上がり、花火も上がっていました。日本でもなかなか見かけなくなった地域が一丸となって盛り上げる祭りに、サンファンで参加することができたのは、遥か離れた南米の地で、日本らしさの最後の残り香が嗅げたようで、良い経験でした。コミュニティ総出で行う盆踊りや夏（冬？）祭りは、これからも共同体の統合の象徴的役割をなし、また民族的アイデンティティを思い出す場所になると思います。

⑨ラパスはボリビアの事実上の首都で、標高は富士山よりも高く、そのため慣れない訪問者にとっては、高山病のリスクがあります。事前に県人会の方に用意していただいた薬を飲み、激しい運動を控えたりと細心の注意を払ったため、高山病にはならなかったものの、階段の上がるだけで息が切れたりと、標高の高さを実感しました。街全体がすり鉢状になっているラパスは坂が多く、また道行く人はスペイン系よりも先住民族、またはメスチゾのほうが目立っていました。

⑩近藤書記官よりボリビア情勢に関するブリーフィングを受けたのち、椿大使にもご応対いただきました。今までは主に農業という観点からボリビアを観ていたが、鉱業や工業、そして政治、更には日本との関わり等外務省としての総合的な見解に触れる事ができ、参考になりました。

⑪青年海外協力隊やシニアボランティアの派遣状況、また具体的な活動内容などの説明を伺いました。ボリビアへの派遣状況は南米における二割を占め、中米・カリブ地域を合わせても、最も派遣されている国だそうです。ボリビアには、比較的多くの職種の隊員が派遣されていますが、職種別に見ると、教育系・医療系・環境系のボランティアが多く、他の職種においては少数派遣だそうです。

３．全体の感想及び今後の目標

今回、グローバルステージを通して私が最も強く感じたことは、日本人の同郷意識、特に福岡県出身者の結びつきの強さです。日本に暮らす私たちは、恥ずかしながら、別段日頃から福岡県民、ましては日本人であることを意識してきたことはあまりなかったのではないでしょうか。しかし、日本から遠く離れたボリビアで暮らす日系人、県人会の方々は、遠くに暮らしているからこそ、より自らのルーツである日本そして福岡を意識している姿を私たちに見せてくれました。

今回、大幅な旅程の遅れで大変な心配をして頂きながら、サンファンで受けた熱い歓迎や、その滞在中、何から何まですべて世話を焼いて頂いたことなど、県人会の方々の並々ならぬご厚意には、只々感謝に堪えないという他はありません。実際に、ボリビア滞在を振り返ってみると、県人会の方々の顔が思い出されないところは（たとえそれがラパスであっても！）どこにもありません。このことからも、そのご配意の甚大なることがうかがい知れます。

日系人の、そのルーツに端を発するアイデンティティだが、私は今回の交流を通して、そのアイデンティティ、そしてそれに起因する人脈こそが、世界各地での日系人の生活、そしてその繁栄を支えてきたのだと思うに至りました。人はやはり協力し、助け合わなければ生きていけません。それが、勝手知ったる住み慣れた町ではなく、遠く離れた海外ならなおさらです。そこで人々をつなげるのは、共通項であり、そしてそれはアイデンティティとして強く各々に意識されることになります。しかし、これは何も海外移住者に限ったことではないと思います。

グローバル化が言われて久しい今、私たちは世界を舞台にする場合はもちろんのこと、ローカルに於いてさえも、国際人であるために、改めて自身のアイデンティティをみつめ直し、私たちが何者であるのかを知る必要があると思います。そして今回得た人脈も含めて、これらを存分に使い、今後はボリビア、ひいては世界中の国々との架け橋にならなくてはならないと強く思いました。

グローバルステージ in BOLIVIA　報告書

立石ガクブチ店
立石 ミュウ 華子

私はボリビアに行く事で、日本では普段体験できない事をたくさん体験する事と、移住先の県人会の若者と福岡県人会がこの先も繋がっていくためには、今後何をしたら良いのかを直接肌で感じ取る事が出来たら良いなと思い、研修に参加しました。そして、実際に以下の事を感じ、学んできました。

１．移民６０年の歴史を、当時の写真と一緒に、１世の方が話して下さいました。この話を聞いて、道の無い原始林だけの状態から道を作り、土地の分配、住む家の建築、米を栽培できる様にする為の土地の整備・開発、子供達の教育の為の工夫、雨季の道路整備の工夫等、様々な事を一から自分たちでしなくてはならなかった大変さや苦労が、日本で事前に調べていた以上に鮮明に良くわかりました。
そして、電気も家も道も無いアマゾン地帯から、生活できるレベルまで環境を整え、現在では米だけでは無く、マンゴー、ポンカン、ライチ、とうもろこし、マカダミアナッツ、鶏卵、牛肉、大豆まで生産できる土地にし、現地の人よりも裕福になっており、その継続力、勤勉さ、不屈の精神、知恵が凄いと感じました。

２．農協施設や農家・農場（養鶏場・みかん園）、大和区（米・牧場）を見学させていただきました。一つ一つの施設が、日本では考えられない様な広さ（車で移動しなければ一周りできない様な広さ）で、とても驚きました。
たくさんの施設を見学して、これだけ広大な土地をきちんと管理・運営できている事や、これから発展する為にたくさんの工夫や配慮、試行錯誤が行われていることが凄いと感じました。

３．サンファン学園では、実際子供達に日本語を教えている授業を見学しました。サンファン学園は、子供達の教育の為にお金を出して作った学校だそうです。きちんと日本語の教育がされており、サンファンに住む日系人は、ボリビアに移民して６０年経った今でも、大人から子供まで日本語で意思の疎通が取れるくらい、全員日本語が上手でした。これは、日本人として、とても嬉しく思いました。
ただ、近頃は日系人の人口が減ってきて、学園内に現地の人の割合が多くなってきているので、子供達は日本語よりもスペイン語の方が馴染み深くなってい

き、会話の為の日本語の学習では無く、日本語試験の為の勉強としての日本語教育の色が濃くなってきているそうです。

４．サンファン日本人入植６０周年記念式典、慰霊祭に参加しました。慰霊祭では、慰霊碑の前に在ボリビア日本国大使館の特命全権大使、サンファン市長や日本ボリビア協会理事、長崎県副知事（サンファン移住地は、長崎県からの移住者が約４割を占めている）の方々が言葉を述べて献花をされていました。その中で、「日本人でなければ、現在のサンファンは無い」という言葉があり、とても感動しました。

次に、記念式典ではボリビア大統領府大臣、サンタクルス県知事、サンファン市長、ボリビア日系協会連合会長、長崎県副知事や日本国際協力財団専務理事の方々が、入植してからの功績や労いの言葉を述べられ、その後に歴代団体長、歴代婦人会長、歴代青年会長や長寿の方々に感謝状の贈呈がありました。

その後、記念祝賀会としてコーラス、日本舞踊、サンファン学園の生徒による民族舞踊、サンファン青年会による民謡ダンス（ソーラン節）や和太鼓愛好会による和太鼓の演奏等があり、日本とボリビアの調和が表現されていました。

ボリビアで振袖や日本舞踊、ソーラン節、和太鼓等のとても日本らしい文化が続いている事に嬉しく、また不思議な気持ちでした。

５．移民資料館を見学しました。移民資料館の中には、移民当時日本から持ってこられた鍬や千歯こぎ等の農具、はんごう、蒸篭やお椀、ランプや湯たんぽ等が綺麗に展示されていました。また、移民してからの節目、節目で撮られた写真やパスポート、サンファン月報等がたくさん展示されています。当時の雰囲気がよく伝わる場所でした。また、今の日本では古い物が捨てられる傾向の中で、キレイに昔の物が残っている事に嬉しく思いました。

６．「１世の方々がボリビアに根付かせた盆踊り」に参加しました。日系人、ボリビア人合わせて約２，０００人が集まるとても賑やかな盆踊りでした。中央の櫓をぐるりと二重に人が囲み、最初から最後まで、音楽も人も絶えること無く、皆楽しそうに踊り続けていました。また、焼き鳥、うどん、巻き寿司、ぜんざいやピザ等の屋台も出ていましたが、全て２１時頃には売り切れになっていました。（因みに、お祭りは２４時まで続きました）とても賑やかで、今の日本よりも日本らしいお祭りではないのかなぁと思う様な盆踊りでした。

７．農産物展示会を見学しました。展示会場には、それぞれの農家の作物や鶏卵等がたくさん展示してありました。また、サンファン学園の子供達、皆が作った

様々な作品や、お年寄りの方が作った団扇、くるみ絵、日本的な絵が描かれた色紙、和風な生地を使ったシュシュやピン留め、ビーズの様なもので作ったリモコン入れやナプキン入れ、習字等たくさんの作品が展示してあり、一つ一つ丁寧に作られていて、とても感動しました。

次に、ボリビアに行き、今後は以下の様な事をするべきではないのか、と思いました。

１．まず、日本の若者に何故移民があったのか知らせるべきだと思いました。実際、周りの友人に「日本人が１００年くらい前に中南米に移民していた事を知っていた？」と聞いてみるとほとんどの人が「知らない」と答えたからです。移民の事実を知っているのと知らないのとでは、関心の持ち方が全く違います。そのため、なぜ移民があったのか関心があれば、移住先の若者と繋がるきっかけによりなると思いました。日本の若者にももっと伝えるべきだと思います。

２．次に、移民した人々の家族関係者（特に若者）がもっともっと移住先の国を訪問できる様な機会を作るべきだと思いました。理由は、身内に移民者がいると関心の持ち方が深いので、家族関係者、特に若者がもっと移民先に行く事で深く繋がるきっかけが出来ると思います。また、今の時代はインターネットで、物理的距離が関係無く繋がれる時代です。若者同士の今時風の手軽に便利な交流手段を使い、きっかけ後の交流が深められると思います。

実際に、私の母の親戚がブラジルに移民しているので、去年の県費留学生と交流した時、自分の心の距離が初対面でも、普通の留学生に対してより近いと感じました。また、上記とは逆の状況になるのですが、日本に来る福岡県費留学生達と個人的に家族で交流した事により、今現在でも、ブラジル、アルゼンチン、メキシコ等の地球の反対側の人達と LINE やメール等のインターネットを通じて交流が続いています。

そして、在ボリビア福岡県人会については、以下の事を思いました。

１．農協、婦人会、青年会での繋がり・団結力が凄いと思いました。盆踊りの前日夜遅くまで、青年会の皆さんが屋台の焼き鳥の準備をしていました。また、婦人会の皆さんは歓迎会、記念式典、夕食会のおかず、盆踊り時のうどんや巻き寿司を皆で協力して作られたそうです。この様に、戦後の日本ではあまり見られなくなった空気、光景を見てとても感動しました。

２．若者や、ホームステイ先の家族、１世の人達と熱く語る機会がもっと欲しかったです。先にも述べましたが、昨年の県費留学生とは、私の家に招待するなど、

個人的に家族として交流していく事で、帰国後も親しく連絡を取り合える様な繋がりを得ました。そのため、広く浅くではなく、ホームステイ先の家族、特に子供達と深く交流する時間がもっと欲しかったです。それに、１世の方に移住当時のお話を聞ける機会は、これから先は益々少なくなっていくと思うので、もっと色々な質問や、話をしたかったです。

最後に、このプログラムを通しての今後の目標は、以下の通りです。
１．今後の県費留学生や子弟招へい事業参加者との交流を深めていきたい。
２．彼らが帰国後も仕事や、個人的にもずっと繋がれるような交流をしたい。
３．家族的な支援をしていきたい。
　理由は、以下の通りです。
① 現在発行されているメキシコ県人会会報に「日本の歴史紹介」が掲載されています。筆者は去年の県費留学生です。彼は、わからない事・知らない事を確実にメールで質問してきます。この様に信頼関係を築く事ができたのは、彼が留学中に、私達家族が活動している「歴史案内」に参加したからです。広く浅くでは無く、本人が一番勉強している分野を通して深く交流できた事で、帰国後も親しくする事ができています。
② 去年の県費留学生の２、３名は目的があって、再来日しています。「日本での拠り所」として、我が家に話をしに来たり、食事を一緒にしたりして家族の付き合いができています。特に、２年前の福岡県人会世界大会が福岡で開催され、博多百年町家（私の家）が「ふるさと訪問先」に選ばれました。その時、県費留学生のご両親と叔父さんが、訪問されていました。その事がわかった時に、お互いにとても親しくなるきっかけとなりました。
　この様にして、自分が出来る事を確実に一歩一歩進めて行き、広めるべき所に情報を広めて行く事が、今後も各国の県人会と繋がっていく上で大切なのではないかと学んだ研修でした。ボリビアに行く事で、日本では有り得ない体験、考え、思いを学ぶ事ができました。有り難うございました。

報告書

福岡教育大学教育学部２年
田崎　里奈

私は、海外県人会人材育成・活用推進事業実行委員会主催のグローバルステージ in Seattle に２０１５年９月９日から９月１７日まで参加させていただきました。この事業に参加し、体験したこと、感じたことを報告します。

私がこの事業に応募した動機は、実際に海外でお仕事をし、生活されている福岡県人に現地で会ってみたいと思ったからです。私は生まれも育ちも福岡県で、今まで海外で長く生活した経験はありません。しかし、私が今生活している福岡市では、アジアを中心に多くの外国人が生活しており、各国を紹介するようなイベントをよく目にするので、福岡が世界に開かれた土地であることを実感できていました。福岡で生活する外国人の視点でお話を聞くのはとても興味深いものです。しかし、海外で生活をされている福岡県人の生のお話を聞く機会はほとんどありません。だからこそ、日本人が受け入れられる文化とはどのようなものなのか、海外で働く方のご家族がどのように生活なさっているのか、実際に日本を飛び出し、現地に足を踏み入れて、お話しを直接聞いてみたいと思いました。

今回、私たちは、シアトルとバンクーバー両県人会の皆様に、大変お世話になりました。現在、シアトル、バンクーバー県人会に入会されている方は、それぞれのお仕事で滞在されていたり、いわゆる日系移民のご子孫にあたるかたであったりしました。

私にとって、様々な交流会を通してお話した方々の中で一番印象に残っている方は、コーケリー・アイコさんです。アイコさんは福岡県のご出身で、旦那様とのご結婚を機にアメリカに渡り生活をしている、１歳半のお子さんをお持ちのお母様です。日本での子育てと海外での子育てには、多くの違いがあると思ったのですが、彼女は海外ならではの子育てを行っていました。１歳半のお子さんを育てている母でありながら、日本語教室で現地の子供たちに日本語を教えたり、そろばんを教えたりするお仕事も並行して行っているとのことでした。小さなお子様を育てながらそのようなことが可能なのかと疑問に感じましたが、すぐにその疑問は解消されました。というのも、福岡県人会内のネットワークで協力しあい、一会員のご家族にお仕事の時間帯、お子様を預かっていただいているからです。福岡県人会の皆様の普段からのつながりを強く感じたお話でした。また、アイコさんからは、子育てのことや国際結婚について様々なお話を伺うこと

ができ、私自身のこれからの人生設計を考えることにつながりました。

私はそのほかにも、この事業を通して日系企業やシアトルで行われている教育について学びたいと考えていました。書物やマスコミ等で多国籍企業について得る情報はありますが、まだまだ日本には外国人で構成された企業が少ないと感じており、日系企業の実態をわからずにいたからです。

実際に訪問させていただいたのは、日本人向けに情報発信を続けている「北米報知新聞社」、日系人を対象にした老人ホームやデイケアサービスを行う「シアトル敬老」、そして教育施設として現地の子どもたちのための私立小中学校である「ベルビューチルドレンズアカデミー」等です。それぞれが、日本人の方々が開業、開校した会社・施設です。私は普段、大学で英語教育を中心に勉強を進めているので、ベルビューチルドレンズアカデミーを訪問できたことは、とても貴重な経験になったと思います。

北米報知新聞社は開業当初は日系人のために、日本の毎日新聞社から情報を受け発信しており、日系人にとってとても大切な情報源の一つでした。現在では、インターネットですぐに今の情報をどこでも閲覧できるため、発刊回数や内容を大きく変化させて、現地の日本人、日系人向けにイベント情報を発信するなど地域に根差した新聞に変化を遂げています。

シアトル敬老は、とてもシアトルにいるとは感じられないほどに日本の雰囲気の漂う施設でした。日系人を中心に入居者を募ったり、開業当初に寄付を募っていたりしたこともあり「日系人、日本人が老後に最も落着く環境をつくりたい」という信念に則ってそのような内装になったそうです。しかし、今では中国などアジア系の入居者を受入れており、日本人・日系人のみに限定しない開かれた施設へと変化を遂げています。また、様々な活動のなかでボランティアの力も非常に大きいというお話をしてくださいました。実際に北米報知新聞社やシアトル敬老でお話を伺って、ビジネスを続けていくには、消費者の需要や環境に合わせて、変化を常にしなければならないと感じました。

ベルビューチルドレンズアカデミーは、清水理事長ご自身の子育ての経験から現地での教育システムに疑問を感じ、そこから日本式のメソッドをベースにした様々な指導法を生み出しておられました。今回は、英語教育についての指導法を一例教えていただきました。音声学を重要視した方法で、日本の子供たちが学習時に用いるような「あいうえお表」にヒントを得、音をどんどん刷り込んでいき、単語、文法と段階を進めていくという方法をとっておられていました。現地校とはいえ、生徒さんの国籍はとても多様で、英語を母語としない生徒さんもいらっしゃるので、この英語習得法に高く関心をもち、また日本式の教育が現地に受け入れられていることに驚きました。

今回のプログラムに参加させて頂き、海外でご活躍されている多くの福岡県人の方と交流を通して学ぶことが多くありました。自分がいかに狭い世界で生きていたかを思い知らされ、これからの自分の人生において、自分のやりたいことをきちんとしていこうと思い直しました。今回お忙しいなか、私たちのために時間を割いて頂き、また多くの貴重な経験をさせて頂いた県人会の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

今後の私の目標として、以前から持っていた英語教員になるという目標を達成するために大学で真剣に勉強すること、さらに海外に積極的に飛び込んで多くの経験や学びを得ることの二つを設定することにしました。

県人会の方々をはじめ、プログラムの計画や引率をしていただいた福岡県国際交流センターや県国際交流局の方々、またこのプログラムに関わって頂いたすべての方々にお礼申し上げます。

シアトル研修　報告書

九州大学農学部２年
津野　愛実

今回のシアトル研修において、私が渡航前に設定した学習目標は、「日系移民の人々の暮らし、食生活について」です。日系移民の方々の暮らしや食生活について、訪問した資料館や、移民２、３世の方のお話を聞くことで、目標を達成しようと努めました。

シアトル滞在時に訪問した、移民資料館では、日系移民の方々の当時の写真や、生活していた家の実物大の復元模型、日本人街の再現模型など、実際に移民の方々の生活に触れることの出来る展示物がたくさんありました。そこでは、日本から移民し、アメリカの地においてイチゴの栽培によって成功した、ある家庭について展示してありました。作物の栽培において、土壌と気候は特に重要なものなので、日本よりも乾燥しており、気温の低いシアトルの地で農業を行うことは、日系移民の方々にとって、日本で行う場合よりも数倍困難なことであったと考えられます。また、家のキッチンには「えびす米」が展示されており、アメリカでも遠い昔に「ご飯」を食べることが出来たことが分かりました。日系移民の方の暮らしについて学ぶまでは、移民の方々は、アメリカで日本式の生活ができていなかったのではと思っていましたが、お米をはじめ、お茶碗やお箸なども展示されていたことから、日本固有の文化を保持しながら生活できていたことが分かり、少し安心した部分があります。食に関するもの以外にも、数十年前にシアトルで撮られた家族写真が展示してあり、その写真には、当時の日本と何も変わらない、祖父母、両親、５、６人の子供、といった構成の家庭の姿が映っていました。しかし、生まれ育った日本を離れ、遠いアメリカの地に移住し、苦労の日々を送って生計を立ててきたという背景を知った上でこの写真を見ると、どこか強い思いを秘めているように感じられました。グローバル化が進んでおり、日本や日本人に対する偏見やイメージが改善されつつある今の時代でさえ、海外で暮らすことは簡単なことではないのに、今から数十年も前に、生活の保障のない、見知らぬ土地で一家が暮らしていくには、相当の努力が必要不可欠であったのではと感じました。今の時代、英語が世界共通の言語であり、子供の頃から英語教育が義務付けられていて、少しは英語を話すことが出来ると思いますが、数十年も前は英語教育など、一般庶民は普通受けることができなかった時代で、いきなり渡米して暮らしていかなければならない状況は非常に辛いものであっただ

ろうと思います。

また、カナダでも、スティーブストン資料館、「MURAKAMI HOUSE」（村上さんの家）、日系プレイスなどに連れて行ってもらい、移住者の歴史について学びました。資料館では、日本人家族の家の表札や、バンクーバーにある日本人街の様子の写真、柔道着など、移民の方々がカナダに移住しても、日本人としての誇りのようなものを忘れずに暮らしていたことが分かりました。「MURAKAMI HOUSE」とは、スティーブストンという町で、船を作って生計を立てて生活していた一家が暮らしていた家の復元で、西洋式の建物の中に、西洋式の内装や家具がありました。その近くには、鮭の缶詰め工場や、従業員の寮が残っていました。日本人の器用さ、勤勉さが異国の地での成功した要因の一つになっていたのではないかと思います。日系プレイスでは、カナダで写真館をしていた日系移民の方が撮った実際の写真や、カナダへの移民の歴史についてのパネル展示がありました。そこには、カナダの地に受け入れてもらえず、差別を受け、馴染めずに苦労したというような記事がありました。私は、プログラム参加前に「バンクーバーの朝日」を見ましたが、映画でもかなり酷い日本人差別の状況が再現されていました。日系プレイスの展示物にあった当時の人々の「生の声」を見ると、相当なものであったのだなと感じました。世界大戦で、日本がパールハーバーに攻撃した時には、カナダにいる日本人は何の関係もないのに排除され、長い時間をかけて培ってきた暮らしを捨てさせられ、収容所に連れて行かれたことに、私は疑問を感じました。同じ日本人であることは事実ですが、血の滲むような努力をして異国で生きて来たのに、全てを捨てなければならなかった日系移民の方々の複雑な思いを考えると、戦争はとても大きな影響力を持つのだなと思いました。

バンクーバーでは日系移民の子孫の方に直接お話を聞くことは出来なかったのですが、シアトル滞在時に、シアトル福岡県人会会長の玉井さんの奥さんのアイリーンさんとお話をすることが出来ました。アイリーンさんは日系３世で、生まれてからずっとアメリカで暮らしていらっしゃいますが、食生活は現代の日本とほとんど同じであるように感じました。シアトルは、海産物が良くとれ、農産物も日本とほぼ同じものが栽培されているので、日本との大きな違いはなかったのではないかと考えられます。現在では、「UWAJIMAYA」と呼ばれる日系人向けのスーパーがあったり、「元気寿司」という回転寿司屋があったりと、シアトルの地で日本食はメジャーになっています。「UWAJIMAYA」では、日本の普通のスーパーで売っている商品がありますが、違う点は日本の数倍の大きさであることとパッケージの言語が英語になっているということの二点が挙げられます。「元気寿司」では、メニューは日本と比べて大きく変わったものはないように感じました。シアトル近海で獲れるサーモンやマグロが全体に占める割

合が若干大きいくらいではないでしょうか。

また、アメリカでは、農務省（USDA）の定める全米オーガニックプログラムという制度によって、農作物、畜産物の「オーガニックであること」についての定義、基準が定められており、「食の安全」に関する意識が高いように感じました。BSE 問題がきっかけで、世間の食の安全性への関心が高まりましたが、ここ十数年の間に、国をあげて安全基準を定めてランク分けを行っている点が凄いなと思いました。さらに、９５％以上オーガニック素材を使用した食品のみしか「USDA オーガニック」のマークを付けることが出来ないという非常に厳しいオーガニックに基準が設けられていました。このオーガニックマークは、シアトルの普通のスーパーや、シアトル発祥のコストコで見かけました。日本では、普通のスーパーでは一部でしか取り扱っていなかったり、専門店にしかないような商品もあったりと、「オーガニック」についての認識がアメリカに比べて低いのではと感じました。私は、母親の影響で、ほかの人に比べて幼い頃から「オーガニック」の商品が身近にあって、自分でも、若干値段は高いが、オーガニックのものを選ぶようにしていますが、日本ではなかなか欲しい商品が手に入らなかったり、「オーガニック」の基準が低かったりと、少し不便に感じることがあるので、アメリカの「オーガニック」商品の身近さ、基準の高さについて非常に関心を持ちました。

今回の研修で、たくさんの方のお話を聞け、多くの場所を訪れることができ、新しいことをたくさん学ぶことが出来ました。そして、その中で、自分を見つめなおすことができ、これから先どんな風に生きていきたいのか、その為に何をすべきなのか、を考えることが出来ました。帰国してからの数週間で、シアトル、バンクーバーでの経験をもとに、自分の人生の指針となるものを決めることが出来た気がします。これから、目標に向かって少しずつではありますが進んでいきたいです。人生に迷っている時に、とりあえず何にでも挑戦してみようと応募したこの研修で、多くの貴重な経験をさせてもらい、本当に感謝しています。県人会の方々、訪問先の方々、当事業に関わっていただいたスタッフの方々、家族、友人、一緒に行ったメンバー、すべての人に心から感謝します。このチャンスを掴めて良かったです。

報告書

九州工業大学情報工学部２年
山本　悠人

この度グローバルステージ in Seattle に参加させていただき、そのプログラムの中で体験したことを報告したいと思います。9月９日に福岡を出発し、１５日の早朝までシアトルに滞在、朝９時１０分の便でバンクーバーへと向かいました。毎日が充実したスケジュールで、時間を持て余すことがありませんでした。特にシアトル滞在中には玉井会長がずっと世話をしてくださり、効率よくまわれるようにスケジュールを調整してくださりました。はじめに１０日間の研修の中で印象的なものを中心にどのような施設を見学し、交流する機会があったか振り返りたいと思います。

まず初日。この日のプログラムの内容としては、Seattle IT Japanese Professionals のメンバーであり Google で勤務されている今崎憲児氏と起業コンサルタントをされている尾中泰氏と懇談でした。シアトルの空港に到着すると県人会メンバーの方が温かく迎えてくださり、車で移動して昼食を一緒にしました。県人会の方々は皆さん明るくパワーがあって、どんな研修になるかまだ不安が残っていましたが、そんな不安を払いのけて楽しく会話をすることができました。

食事後に Kirkland へと移動し、今崎さん、尾中さんと懇談しました。到着してまず Google を見学する時間があり、社内をみてまわることができました。食堂のメニューはフリーで、外食する時間や食事を買いに行く時間をなくすためにそのようになっているようです。オープンスペースになっていて仕事の話も研修チームでよくするようです。他にいろんな種類のコーヒーが飲めるスペースがあったり、気分転換のための卓球台、ボルタリングをするスペースがあったり、ボートのようなものがあったりと日本の職場ではあまり見かけないものが多くありました。会議をする部屋もいくつもありましたが、各々が好きなスペースで自由に仕事をしている印象でした。ペットも持ち込み可で、特に出勤時間があるわけではなく、終了時間も決まっていないようです。仕事は職場に出てこなくて家でやっても良いらしく、本当に自由な職場で魅力的でした。逆に日本にこの環境を持ち込んでも仕事ができない気もしました。初日のこのプログラムが個人的に最も興味のあるポイントでした。長時間のフライトの後で大変なところもありましたが、訪問することができて本当に良かったです。

また、バンクーバーで訪れた CK Marketing Solutions での懇談も、個人的に関心があり面白かったです。起業された長勝博氏本人が、会社の概要からどうして海外で起業をしたのかをプレゼンと資料を使って説明してくださり、とてもためになりました。

２日目以降は朝から夜までずっと動きっぱなしでした。時間になったら次の場所へと車で移動して施設や会社を見学しました。移民の歴史に関しては、ホワイトリバーバレー博物館で当時の部屋を再現したものや街並み、鉄道や農業といった暮らしぶりを見ることができました。シアトル歴史産業博物館でも多くはありませんでしたが、日本からの移民の歴史について展示されていました。シアトルの歴史のなかに日本人の存在があって少し驚きました。他には日系人向けに新聞を発行している北米報知新聞社を訪れてお話しを聞く機会がありました。現代では日系の方々も減り、時代に合わせて日系コミュニティについて主に情報発信しているようでした。

場所を移してバンクーバーの方では、スティーブストンを訪れ、日系プレイスの中の日系博物館に行きました。スティーブストンは港町で日本人が従事した施設が少し残っていたり、Murakami House という村上音吉氏の旧宅が残っていたりしました。Murakami House の中は、当時の内装がそのまま残されている状態で興味深いものでした。そのバンクーバーの２日目には、日系軍人慰霊碑とトーテムポールパークを見る機会もありました。他にも日系人向けの介護、リハビリセンターや Bellevue Children Academy の教育現場、食肉流通の会社やボーイング社を見学しました。シアトル総領事館では日本とシアトルの関係についてレクチャーを受けました。

大学訪問をする機会もあり、シアトルでは Bellevue 大学、バンクーバーでは British Colombia 大学を訪問しました。Bellevue 大学は College ですが、ワシントン州で３番目に大きく高い教育レベルを誇る所でした。留学生向けのコースをいくつか紹介してもらいとても興味深かったです。別の日にこの Bellevue College で秋祭りというのがあり、日本の文化を紹介していました。日本の方も多く見受けられ、海外に来ていることを忘れてしまいそうでした。British Colombia 大学では院生の方と交流しながらキャンパス内を歩きました。キャンパスは広大で施設もきれいでした。院生の方との会話は英語を使ういい機会で、もっといろんなことを会話できればよかったですが、自分の英語力のなさを痛感しました。

事前研修の際に耳にしたことではありましたが、本当にプログラム期間中お腹が空くことがありませんでした。今となっては、もっとあの料理を食べたいなと思うものもありますが、滞在期間中ははいりませんでした。夕食はいつも豪勢で存分にもてなしていただきました。食事の際には、県人会の方といろんな会話

をし、時には講演もありました。いろんな職種の方がいて仕事の話も興味深かったですし、どうして海外に来ることになったのか話が聞けてよかったです。日本もグローバル化は進んでいますが、まだまだ海外に留学することや仕事をすることに対して、ハードルが高いイメージがありました。しかし、現地に住んでいる方、仕事をされている方と話すことができて良かったです。

今回の研修では、多くの方と出会いお話しを聞く機会がありました。

山下かすみさんからは、人生を歩んでいく上で大事なものとして、7つのポイントを挙げてもらいました。その中でも“follow your passion, push yourself”というのは背中を押してくれる良い言葉でした。必死に努力してくことが大切であるというメッセージも込められていると思いました。

末次乗治さんからはベトナム戦争での体験を話してもらいました。戦争体験者の話を聞くことは初めてでとても貴重なものでした。目の前で友人が亡くなっていく光景を目の当たりにする悲惨さは、きっと体験した人にしかわからないと思います。私も父を事故で亡くし、あまりに突然のことで深い悲しみに暮れましたが、下手に同情の言葉をかけられても何の励みにもなりませんでした。戦争を体験した人がほとんどいなくなってしまっている現代において、戦争の体験談を語り継いでいくことが大切とされていますが、なかなか直接聞く機会もありません。本当に良い経験でした。

今崎さん、尾中さんとの懇談では、お二人の仕事の話がとても興味深かったです。まだ専攻が決まっていない現状では、私から話を深く掘り下げることができなかったのが残念でしたが、今ＩＴの最先端で働かれている方のリアルを聞けたと思います。

今回の研修中に何度か耳にした「日本との違い」として、ボランティアの普及がありました。アメリカでは、会社規模でもボランティアに大きく社会貢献しているし、個人でもするようです。県人会の方々もボランティアで私たちのことを本当によく面倒を見てくださいました。“自分がお世話になった県人会に恩返しをしたい。”“ボランティアをすることで給料はもらえないがそれ以上に自分に返ってくるものが多い”など、とても良い循環だと思いました。自然とボランティア活動に参加できるようになれたらいいなと思いました。

このプログラムの中でお会いした方で名前を挙げていない方もまだたくさんいらっしゃいますが、お会いできた方々、皆さんに感謝をしたいと思います。私たちの要望もできる限り実現させようと、多くの方が動いてくれました。本当に贅沢なプログラムでした。プログラム中、度々“人脈”という言葉がでてきましたが、今回の派遣で一緒に渡米したメンバーを含め、現地で出会った方との“ご縁”を切らさずに、これからの人生に生かしたいです。

グローバルステージ in Seattle　報告書

西南学院大学人間科学部３年
久保田　琴乃

２０１５年９月９日～９月１７日の９日間、県人会担い手育成青年派遣事業に参加し、アメリカのシアトルとカナダのバンクーバーで研修をさせて頂きました。今回私は、多彩な一流企業がシアトルを本拠地としている中、その最先端技術の下支えをする技術系コミュニティについて学ぶこと、海外の福祉について学ぶこと、日系人の歴史について学ぶ、これらの３つ目的持って渡航しました。現地で活躍されている日本人の方々、県人会の方々に大変お世話になり交流を通して異国の生活様式を実際に肌で感じることができました。また、生活習慣や食事、文化、風土の違いに気付くことができ、さらに現地企業の視察では様々な分野の企業を訪問させて頂き、自分の成すべきことを見据えることができました。今回のプログラムで一番印象深かった日系人の歴史と福祉に焦点を置いて研修の報告をさせて頂きます。

今回の研修は玉井会長を初め、県人会の方々の様々な手厚いサポートがあり実現することができたと思っております。県人会の方々との交流を通して感じた事は、皆さま人と人との繋がり、人脈をとても大切にされていることです。今回私たちがシアトルを訪れた際も歓迎してくださり、おもてなしがとてもすごくて嬉しかったです。

研修３日目に訪れた「シアトル敬老」では、施設設立の経緯、施設の概要を説明して頂き、施設内ツアーでは、入居者の方と少しだけお話もさせて頂きました。こちらの施設は NPO（非営利団体）が運営を行っており、アメリカには日本人（日系人）のための医療的サービスが提供できる特別養護老人ホームはシアトル敬老を含めたったの２件しかありません。そのうちロサンゼルスにある施設はクローズが決まっており、将来はシアトル敬老だけになるということでした。

しかし、なぜシアトルに日系人のための福祉施設があるのかというと、日系人の歴史と深く関わってきます。明治時代に明治維新の土地や税制の改革で次男坊、三男坊、四男坊の若い男性は職を求めてアメリカへ渡航しました。彼らは日系一世と呼ばれ、彼らを迎えたものは過酷な労働条件でした。雇われ労働者としての職場は農場、缶詰工場、材木製材所、鉄道建設といったところでしたがそれでも勤勉な一世たちは一旗挙げて日本に帰るぞという強い想いで懸命に働きました。しかし、勤勉な一世たちの存在に強い反感を抱いていたアメリカ人は少な

くなく、差別的な連邦法により市民権を取得することも許されない状況にありました。さらには１９０８年、日米間で紳士協定が締結され、日本人労働者の米国への入国が禁止されることになりました。ただし、アメリカ在住の日本人の家族のみ、渡航が許可されました。そこで、一世の男性たちの中には、日本に一時帰国し、結婚して花嫁を連れてアメリカに再び戻ってくる者もいましたが、大半は「写真花嫁」というお見合い方式で写真でしか見たことのない一世男性との結婚を決意し、アメリカに渡航してくる日本人女性もいました。花嫁たちの来米により、アメリカ生まれの新しい世代が誕生し「日系二世」と呼ばれました。しかし、このような日系アメリカ人の人口構成の変化は、新たな反日感情を招く結果となりました。

アメリカに渡った日系移民たちは一部地域に集まり生活するようになりました。各地で日本人のコミュニティが形成されいくつもの日本人街ができました。１９４２年大統領命令が張り出され、日本国籍の一世だけでなく、アメリカ国籍を持つ二世も適性外国人とみなされ、移転所に出頭するようにと告知されました。屈辱を味わいながらもアメリカ国家に対する忠誠心をあらわすためこの強制立ち退きに従い、１２万人以上の日系移民がバラックの掘っ建て小屋で暮らすことを余儀なくされたのです。しかしながら連邦政府は、日系人の拘留がいずれは解消されることを承知しており、誰が安全かを見据えたうえで収容所外に開放することとし、１９４３年にアメリカに対する忠誠登録を行いました。アメリカに忠誠を示した者はアメリカ陸軍の日系人部隊である４４２連隊戦闘団に配属され、アメリカのために命を惜しまず戦いました。これは、後に、ハリー・トルーマン大統領に讃えられました。今回日系人の歴史を学ぶ中で迫害や日系人の方の心の痛み、そして逆境を乗り越えて懸命に生き抜く姿に感銘を受けたと共に、日系アメリカ人の生き様を目の当たりにしました。

月日が流れ１９７０年代頃に日系一世が年老い、二世がキャリアと家族を築き始めました。日系一世はアメリカの老人ホームで生活したいと思っていましたが、日本とアメリカでは文化、生活習慣、価値観が異なり、さらには人種差別も受けていたため、アメリカの老人ホームでの生活は困難でした。そういった背景から、１９７５年、日系二世が一世の幸せな老後の暮らしのために「日系コンサーンズ」を設立しました。初めは７名で会を作り、日系コミュニティの方々から寄付を募り、集まったお金で、たまたま売りに出ていた老人ホームを買ったのがこの団体の始まりです。１９７６年にシアトル敬老が始まり、初めは入居者４３名という小さな施設でした。施設の概要については、「ニッケイコンサーンズ」という団体の中に、シアトル敬老リハビリテーションケアセンター（特養）、ニッケイマナーアシスタントリビング（介護付きアパート）、ココロカイアダルトデイプログラム（日帰りのデイサービス）、ニッケイホライズン（シニアセンタ

ー)、トランスポーテーションプログラム、ケータリング、ホームケアサービスの７つのプログラムがあります。一つの団体が運営しているため、次のレベルの介護が必要となった際にスムーズにプログラムを変更できるようになっており、さらに担当者も継続的に支援できるため、入居者（会員の方）が安心してサービスを利用することができます。私が知る限り、日本にはこういった仕組みを行っている団体はないと思います。日本は世界でも類を見ない超高齢社会に突入しており、今後益々深刻化していくことは間違いありません。ニッケイコンサーンズが行っているようなプログラムの仕組みを日本の老人ホームにも取り入れていくことが出来れば、老老介護問題や孤独死問題など未然に防ぐことができると考えます。私自身、もっと海外の福祉制度や施設に目を向け、高齢化社会についての知識を深め、自分にできることからアクションをおこしていきたいと思います。

最後に、今回の研修を通して気づいた私の一番の変化は、多くの人との出会いに恵まれ、様々な価値観に出会い、常識にとらわれず、多様な考えを受け入れられるようになったことです。未知の世界に飛び込むことで、新しい人との出会いや発見につながることを知り、挑戦することの大切さを学びました。また、今回の研修で出会った方々とのご縁を大切に、今後も交流を続けていきたいと考えております。

報告書

杉村包装資材株式会社
今村　友梨香

私が今回、グローバルステージに参加させて頂いた理由は、現在の国際情勢の核となるアメリカへ行き、直接現地の歴史や文化に触れ、社会人としての教養を高めるためです。今回、この研修の中で玉井会長様をはじめ、シアトル、バンクーバー両県人会の方々とたくさんの出会いがありました。

現地の訪問先では実際に海外で成功した方の話も聞くことができ、社会人の私にとっては非常に良い刺激になり、日々、何気なく仕事をしていると忘れそうになる当たり前のことは、当たり前ではないということを、改めて考えさせられ大切なものは何なのかを見つけられました。日常には常に「変化」が必要でありその「変化」を生み出すためには、自らの行動や意識を変えて行かなくてはならない事、そして、人生において勉強は続けていかなくてはいけないものだという事も学びました。

日系人の歴史を学ぶところでは、戦前から戦後にかけての当時の生活、労働の様子を解説、写真等を通して学び、敵性外国人と言われ、権利の侵害をされながらも日本人としての誇りを持ち、小さいコミュニティの中で勇敢に戦ってきた方々の歴史も学びました。当時は、写真だけで結婚相手を決めるという写真花嫁というものがあったことも初めて学びました。多くの花嫁達をアメリカで出迎えた男性は、写真よりずっと年を取り、聞いていたような財産もなかったという場合が多々あり、中には結婚を拒んで、帰国したり逃げたりする女性もいたようで、女性としての権利をも奪われていた時代があった事も学びました。それでも何千もの女性はその状況を受け入れて、家族を育て、夫と共に懸命に働いて、新しい国での生活を築いていったことを知り、今の自分の平和な暮らしがどんなに恵まれているのかを考えさせられ心が痛みました。

また、ベトナム戦争を経験された末次副会長の話を聞き、自分の友人が目の前で殺される悲しみ、自分で命を絶つ者を目の前にした時の何とも言えない空虚感は言葉では言い表せないほど辛く苦しいものと聞き、涙が止まりませんでした。次世代を担う私たちが出来ることは、日系アメリカ人の歴史を理解し、各地の日系人コミュニティとの交流を深めていくことだと感じました。

県人会の方の講演会では、日本人としての意識、行動する事の重要性、そしてなにより人生においてもっとも重要で宝物になる人とのつながり、すなわち「人

脈づくり」の大切さを教わりました。

また、生活する場所、活躍できる場所は日本だけではないこと、今の自分の置かれた状況の中でどれだけの力を発揮できるのか、そして人生のライフスケジュールをたてることの大切さを学びました。

その中で、まず、ベルビューチルドレンズアカデミーの清水校長先生の講演で心に残っていることがあります。それは、成功する秘訣は、自分のやることは常にパーフェクトを目指し、良い時ばかり人に頼るのではなく、自分で行動する力を身に着け、広くて太いコネクションを作っていくことだということです。私はその言葉が深く胸に残り、その言葉の意味も良く理解できました。良い時ばかり人に頼っていては、周りはついてこないことを実際に社会に入って実感したからです。きっと学生の頃の私には理解できないことでしたが、社会人になり、自分より年齢も職歴も上の方たちと接することで、世の中の厳しさ、自分の未熟さを知りました。清水校長先生の講演は、実際に体験された話も交えながらの話だったので、非常に説得力がありました。さまざまな分野で、海外で活躍している方々のチャレンジ精神を感じ、何事にも前向きにトライしていくことの大切さを教わりました。

そして、社会という枠の中での自分の立ち位置も考えさせられ、これからの社会人生活の中で貴重な経験をしたと思います。常に勉強し、見聞を広めることで自らのスキルアップへ繋げること、スキルアップを積極的、意識的に行わなければ次のステップへは進めない、自分を磨くこともできないことを学びました。

自分が輝き続けるためには、自分の力で自分磨きをする。そのためには日々の積み重ね、日々の努力を続けていくこと、そうしなければ、狭い範囲の中での自分しか見られなくなることを学びました。もっと広い視野の中で物事を見ること、世界へ目を向ける機会を持つ事の大切さを今回の研修で知りました。

「大きなことは小さくパッケージングされている。」

講演をしてくださった山下さんがおっしゃっていたように、視点を変え、物事をもっと柔軟に考えることで、今までとは３６０度違う角度からの物の見方、考え方ができる事、大きなビッグチャンスは自分で見つけて自分の力で掴みに行くしかないということを強く感じました。そして自分への投資を惜しまず、人脈を出来る限り広げ、自分という人材をブランディングしていくこと、仕事とは自分の身の回りのこと全てに感謝し、その何倍もの恩返しをしていくこと、それが社会人としての役目であり、社会への貢献だと思いました。

今回の研修に参加する機会を与えてくださったグローバルステージの関係者の方々、会社の社長、上司の理解のもとでの研修が出来たことへの感謝の気持ちを忘れずに、これからの福岡県を担う人材として大きく成長し、この研修で出会えた方との縁を大切にしていきたいと思います。